

面倒な相棒 中編

平成 23 年 12 月 21 日(水)

幻想譚工房

「クヴァレ、昨日のことなんだが……」

翌朝、制御室でデータの打ち込みをしていたクヴァレに意を決して話しかけた。何故かソフィアが部屋の隅で毛布をかぶって眠っており、クヴァレも眠そうにあくびをかみ殺しながら作業をしていた。二人で徹夜か、相変わらず仲が良いな。

「うん？ 文月か」

画面を注視していたクヴァレから返事が帰ってくる。私の声でソフィアも目をさましたらしく、あくびをする声が聞こえてきた。

「その、何だ」

頭の中でいくら練習しようとも、本番では役に立たないものだ。昨夜も頭の中で会話の流れを繰り返しイメージしたというのに、クヴァレを前にしてそんなものはいともたやすく吹き飛んでしまった。その事を痛感しながら、ゆっくりと言葉を綴る。

「昨日はすまなかった、言いすぎてしまった」

「……まあ、気にするな。俺も悪かった」

「えっ？」

「あっ」

びっくりした、クヴァレの口からこんな言葉が出るとは思ってもみなかったのだ。一体どうなっているんだ。

「クヴァレ……今なんて——」

バンッ

「うっ」

また驚いた。どうやらクヴァレが机を叩いたらしい。私が叩かれるんじゃないかとおもって思わず防御の体勢を取った事が情けない……。

恐々と目をあけると、すでにクヴァレは出入り口の方向へ歩き出していた。

「よし、設定も終わったしこれからすぐ出るぞ」

「ま、待って。どこに出るんだ？」

「お望みの実地試験だ。すぐに準備してくれ」

そう言うとそのまままっすぐ部屋を出て行ってしまふ。

茫然と閉まる扉を見つめているとソフィアが隣から飛びついてきた。

「ふみちゃん、おはようっ」

「あ、ああ。おはよう、ソフィア」

「クヴァレったら本当はふみちゃんが気掛かりなのに無愛想で偏屈なのよ……
もっと素直になればいいのに」

「……そうなのか」

なるほど、ソフィアの気持ちがだんだんわかった気がした。クヴァレにも可愛いところがあるんじゃないか。

そういえばさっきのクヴァレの奴、目にくまを作っていたな……。今夜あたり、偶然を装って差し入れを持って尋ねてみるのも良いかもしれない。

実地試験は島を離れ、大陸の山の中で行う。ディスパテルの国境付近の誰も人が立ち入らないような険しい山の中だ。

姿勢制御と駆動系の試験という名目で、起伏の激しい山の中を大量の荷物……もとい装備を持って歩き回るのだ。

クヴァレとソフィアはそれぞれ観測機と高負荷試験用の武器・弾薬を持ってはるか上空を飛んでいる。

今回はソフィアの観測と通信のテストも兼ねているらしく、鬱蒼とした森の中を走る私は、ソフィアからこの道の先にある分岐点や起伏などの情報をもらって進んでいる。

クヴァレは次集まる頃にはいつもの無愛想に戻ってしまって少しがっかりしたが、それを差し引いても外に出れたことがうれしくて今の気分は上々だ。

「体の調子はどうだ？」

「絶好調だ」

気分だけじゃなく、体の調子もすこぶる良い。

不思議な感覚だった。いつも身につけている装甲の上に、今日はさらに重い装備をたくさん取り付けているはずなのに、まったく重みを感じない。

3日間ずっと調整を続けていたおかげなんだろうか。あの時はついカッとなって文句を言ってしまったが、今こうして思うと3日間があってこそこの今日なのかもしれない。

曲がる時に慣性が少し強く働くなどは思ったが、それもいつの間にか扱いに慣れてしまい、まったく普段の自分と変わらない状態だ。今ならどんなに重いものを担いでもずっと遠くまで走っていけそうな気がする。

午後はさらに兵装を積み込み、実際の稼働状況に限りなく近い状態で同じ試験をするらしいが、この分だと問題なさそうだ。

「そんな言い方では分からない、もっと詳しく言ってくれ」

せっかく気分よく走っているのに、クヴァレから手厳しい指摘が入る。そっちは私の状態が逐一わかる装置を持ってるんだから、私に聞くことは何もないだろうに。

「……制御系良好、駆動系良好、装備間の干渉も無く移動時の異常違和感ともにまったく見られない」

「それなら良いんだ、試験を続けてくれ」

クヴァレに向かって軽く当てつけのような返事を返ししながら、森の中を進んでいく。

次第に標高が下がり起伏もなだらかになってきた。日は天高く上り、そろそろ昼時というところだろうか。上空を飛んでいたソフィアから連絡が入った。

「5 キロ先に魔物の群れを見つけましたわ、距離を置くようにルートを決めてください」

「わかった……次の分岐を左に曲がってくれ。魔物と距離を置こう」

「了解した」

「あっ、だめ。曲がった先にも魔物がいるわ」

「……どっちの方が距離が遠いかわかるか？」

「えっと……直進した方ですわ」

「分かった、回避ルートを模索しつつ、どうしてもダメなら迎え撃つ」

今日は駆動系の負荷テストの目的で来ているはずだ。ソフィアが持っている弾薬も午後からの高負荷試験のための重りであって、今日は一発も撃たない予定だった。

「クヴァレ、来た道に戻るのはダメなのか？」

これまでが測定だけだったから武器の扱い方などまるで分からないし、何より今日は火器管制のユニットが稼働していない。つまりは街で暮らしている人たちと何も変わりが無い状態だ。

「来た道は起伏が激しいうえに広い場所がないからもしもの時にお前を回収できない」

「そうか……でも魔物を殺すのは——」

「大丈夫だ、今回持ってきたのは試験用の模擬弾だから威力は小さい。ものすごく痛いかもしれないが死ぬことはないだろう、あとはしっかり目で狙って弾をばらまいてくれ」

初めての实战はすこし緊張するが、ここでうまく立ち回ればクヴァレも私を見直すかもしれない。

そうしているうちに分岐点まで来た。ソフィアとクヴァレの指示通り直進する。

「ちょうど良い大きさの広場まで案内してくれ、そこに荷物を下そう」

「わかりましたわ」

ソフィアの指示通りに進むと辺りが開けた場所に出て、そこにはすでにクヴァレとソフィアが待っていた。すぐにクヴァレが私のアームに武器を取り付け始める。

「テストを兼ねた実戦になるから、危ないと思ったらすぐに逃げろ」

「今日の私は調子が良いんだ、すべて追いついてみせよう」

「勘違いするなよ、お前は中距離型なんだ。近距離での戦闘は想定されていない」

「おっ、そんな事はわかってる」

「わかってない、実戦だって今回が初めてじゃないか」

「確かに訓練は受けていないが、武器の撃ち方ぐらいは心得ている、あとは敵に向ければいいんだろう？」

「そういう問題じゃなくて——」

「二人ともやめてちょうだい、魔物が近くまで迫ってるのよ」

「……とにかく、魔物との間合いが詰まったら銃を使うなんて考えるな、絶対に当たらない」

「わかった」

口ではそう答えつつも、手早く追いついてクヴァレを見返してやりたいと思っていた。そうすればうるさい小言も少しは減ってやりやすくなることだろう。兵装を身につけてゆっくり立ち上がると、ずしっと重い感覚が走った。武器を取り付けただけでこんなにも違うものなのか？

「文月、違和感はないか？」

「問題ないっ」

つい声を荒げて返事をするが、正直なところ大問題だ、これじゃ思うように動けない。常に後ろに引っ張られてる感じで、気を緩めたら転んでしまいそうだ。でもそれをクヴァレに伝えたらまたグチグチと難癖つけてくるに違いない。魔物を追いついたらきつく文句をいってやろう。

「ソフィア、もしもの時は文月のサポートを頼む」

「わかりましたわ」

クヴァレとソフィアがゆっくりと宙に浮かびあがると同時に、近くで魔物の遠吠えが聞こえた。

「逃げる暇も与えてくれそうにないか」

「任せろ、近寄られる前に遠くから牽制する」

広場の真ん中までゆっくり歩くと手を水平に伸ばし左右に向かって銃を構える。さあどこから現れるんだ？

「正面から来るわ」

「わかった」

ソフィアが言ったと同時に正面の茂みから魔物が 2 匹現れる。狼のような見た目の奴らは、私を見つけるとすぐに向かってきた。まったく、私なんか食べたところで腹を壊すだけだぞ。

地面を狙って引き金を引くと、乾いた音が響くと同時に魔物の足元の土が次々に小さく炸裂する。

それに驚いた魔物が一瞬ひるんだ。

「よし、そのまま撃ち続けろ」

「わかってる」

魔物の周囲に向けて続けざまに撃ち続けると、尻尾を巻いて逃げていった。まあ、ざっとこんなものだろう。何だ、火器管制が無くてもこんなに正確に狙えるんじゃないか。

これで済むなら逃げる必要もない、何体だって相手にできる。クヴァレの心配性め、私はこれくらいじゃ――

「ふみちゃん、後ろっ」

「えっ」

突然のソフィアの声に振り返る暇もなかった。

背中にドンと魔物がぶつかる衝撃が走り、そのまま地面にうつぶせに倒れる。

「うっ」

背中の武器に押しつぶされそう。重くて寝返りすらうてない。

「文月っ、今向かうから待ってろ」

クヴァレの叫び声が聞こえる。

それにしても、背中の武器はどうしてこんなに重いんだ、これじゃ使い道がないじゃないか。

接続情報にはライフルと載ってるが、何の事前知識もなしに突然取り付ける羽目になったからどういった場面で使えばいいのかなんてさっぱりわからない。ソフィアに魔物の位置を聞こうとしたとき、足に痛みが走った。

「ぐっ、こいつっ」

魔物が私の足に噛みついたのだ。足をばたつかせて振り払おうかとも考えたが、牙が食い込んで傷跡になるのは嫌だった。

そっちがそう来るなら、これでどうだっ。

背中のアームでそのライフルとやらの銃身を噛まれてる足の少し上くらいに定め、引き金を引いた。

ズゴーン

腹に響く音がして、背中に強い衝撃を感じる。それと同時に足に生温かいものが飛び散った。

「きゃああっ」

「文月い！」

ソフィアの悲鳴とクヴァレの怒鳴り声が同時に耳に飛び込んでくるが、引き続き声を発したのはクヴァレだった。

「この大馬鹿野郎、どうして対物ライフルを魔物に向けたっ」
寝返りがうてない私には今一つ現状が把握できないが、ソフィアが悲鳴をあげクヴァレが怒りだす状態になっているようだった。

「まっ、まずは起こしてくれないか？」
明らかに不満そうな顔をしてクヴァレが私を引っ張り起こす。と同時に後ろに引っ張られ、2、3歩よろめいた後その場に尻もちをついた。
ビシャッと水がはねる音が聞こえる。

「痛たた」
お尻をさすりながら辺りを見て絶句した。

「なんだ……これは」
あたり一面が赤い血で染まっており、私はその血溜まりの上に座り込んでいた。
当の魔物ははるか後方に原型も分からない塊で打ち捨てられてる。
これを私が、やったというのか。模擬用の弾薬だから魔物は死なないんじゃないのか？

「いくら緊急とはいえ使う武器を選べ。至近距離で打ちやがって、体に損傷が起きたらどうするつもりだ」

「……ごめんなさい」
ショックだった。ちょっとケガさせて追い払うつもりだったのに、残忍な方法で命を奪ってしまった……。まさかこんな事になるなんて思ってもみなくて、心が引き裂かれそうで、泣きたくなった。

「とっさの自衛のために仕方がないとしても、だ」
クヴァレが怒った顔をして近寄ってくる。
「どうしてバランスが悪かったのにあの時言わなかったんだ」
クヴァレの低く冷たい声が私の心臓を握りつぶす。

「それは……」
地面に目を落とす。正直なところ、私の考えが甘かったのだ。どうにかなると思っていた。

血に染まった両手が私の心をぎゅっと押ししぼる。血でぬれた足と腰が重みを増し、私の心がこの沼の底まで沈んでいくような気がした。
視界が狭い、気持ちが悪い、頭がふらふらする……。

ジジジジ
どこからともなく異音がして、焦げるようなにおいがたちこめた。そのにおいにはっとしたクヴァレがあわてて私の背後に回りこむ。

「電源ユニットが損傷してる。文月、アームを取り外せっ」
文月、アームを取り外せ
クヴァレの言葉が頭の中を繰り返して響いていく。

手足だけでなく心までも重く、何も考えられない。何も動かせない。全身がガクガクと震えて寒い。

「おい、文月。大丈夫か？」

なんて返事をすればいいのか分からない、焦って全身が熱く焼ける。

「自分が怖いよ、何も分かんないようっ」

この場所から逃げ出したい、何も無かったことにしたい、落ち着くまで放っておいてほしい。

「まったく世話が焼ける……。待ってろ、いま外してやるからな」

そう言うとクヴァレが私の背中についての装備を引っ張りだした。

背中からプラグが引き抜ける感覚と同時に視界が青くなる、上にいまさっき装備を引き抜いたクヴァレと、木にひっかかっているソフィアが白い手足をだらりと垂らしているのが逆さまに見えて、ぼんやりと仰向けに倒れたんだと分かった。

煙を出し表面に電流の走る装備を持ってクヴァレが私の元から離れていく。

クヴァレを目で追いかけると、視界の先で小さな爆発が起きた。

私は自分勝手に事故を起こして、その後始末すらも自分では何もできない……。

爆風で宙を舞うクヴァレがゆっくりと地面に叩きつけられる。

私の中の何かが、音を立てて壊れていった。